

学校給食については考慮すべき点や改善すべき点もまだまだあるのではないかと思います。

## 学 園 祭 を 顧 り み て

大食2 長谷川 和 子

人間が生命を維持していく為に必要な食というもの、その食の合理化——通常『食生活の合理化』といわれているが——といえば 食品から食形態、施設設備の合理化と言った具合に取り上げられる内容も非常に幅広いが、購売意欲を高める為の一種のコマーシヤリズムに流されて、食生活の合理化後の私達という事だけに着眼している傾向の強い現在、私達はここでもう一度、食生活の合理化の本質をつきつめて検討してみる必要があると思ひ、大食1、2回生共同で次の様な研究に着手した。

食品は全て無害であるという事から当然出発すべきものであるが、食品の栄養価が考慮され、食品調理に費す労力及び時間の節減の為の種々の策がこうじられている現在。これらの食品は二次的のみに左右されて最も基本的な条件を軽視している様な事はなないだろうか。もしそれが軽視されているならば、例え食生活の合理化がなされたとしても、これは全く意味のない事であり、一つの概念基底からはずれる事になる。食欲をそそる様な外観を有し、長期間保存できる様な食品でも、有害な色素や防腐剤を使用していたり、生産過程が清潔でなく、種々の異物が含まれていたりするならば、前述の最も基本的条件を軽視している事になる。これらの点を直接確認する意味に於いて、私達は特に食品中に含まれている色素及び混入している異物、特にダニの問題を取り上げ、研究して見た。

全てが私達に取つて始めての試みであつた為、私達自身の手による私達自身の研究をという原則から幾分はずれた感もないわけではなかつた。クラブ、同好会などの様に、ある事柄に興味を持つた人間が集まつて、それを年月かけて研究し、その成果を学園祭という場で発表するという理想的形態から余りにもかけ離れている為、私達の研究は学園祭の為に泥縄式に研究問題を設定し、研究する人間を集め、短時間でまとめてそれ

をある程度形あるものにするという状態であつた。時によつて先生方に助言以上の物を求めたという事も避けられなかつた実情であつた様に思ふ。しかしいつでも時間の許す限り、私達の全力を尽して努力したつもりである故、その点に於いては考慮していただきたいと思ふ。実験を行う際、あらかじめその方向付けをしておき、それに従事する人に実験方法だけでなく、一般的知識を理解してもらふ事は、実験を行う際の第一段階であるが、今思ふと 時間に追い回されて、それさえもおろそかにしていた様な気がする。クラスの研究もクラブの研究と同様に、学園祭の為の研究ではなく、学園祭を一つの発表の場とする研究に一日も早く仕向け、私達自身もこれに向つて努力しなくてはなるまい。

さて、色素及びダニの研究であるが、ダニの方は一応マスコミ等によつて、七味等の食品中にダニが含有されているという事を知らされている人が多かつた為か、大多数の人が興味を示してくれたが、色素に関しては少々専門的であつた為か、無関心で、化学方面に興味を覚えている人にしか理解してもらふ事がむずかしい様であつた。種々の成果を発表する場合、常にその対象が問題となる訳であるが、学園祭とは如何なる人達を対象とすべきなのであろうか。学生、それとも中高校生、父兄などをも含めた幅広い人間層を対象とするのであろうか。色の濃淡でその食品が害があるか否かを判断している人達、あるいはそれさえも感じず、ただ色がきれい、即ち外観が素晴しければよいと思つている人達にも、この様な機会を通して、今一度食品に添加されている色素に関して考慮し直す様な方向に目を向けさせる責任があるのであろうか、仮りに幅広い人間層を対象としてのものであるならばただでさえも余り身近かに感じない化学実験を如何なる形でまとめ、多種類の人々に理解してもらふ為、物事を如何に多角的に捕え、発表するかという事が私達の大きな課題である様に思える。多角的研究、多角的発表に徹する事、これは常に同一の場に固執しやすい実験に常に要求される事であるが、非常にむずかしい事である。多角的に物事を捕えた場合、自づから幅広い成果が期待できるが、安易な気持でこれを行つと全てが錯乱し、かえつて思わぬ結果を生じる事にもなる。しかし、多角的研究の必要性は周知の事実であり、例え実験結果より ある一つの結論を得る事ができたとしても、ある一つの立場に固執している限り、その確信度は大変薄い。私達の研究に於ては独創性というものあまり要求されなかつた為、多角的に物事を捕えなくても、誤つた結論を得る危険性は少なかつたが、物事を捕え得る範囲が狭く、かつ参観者の階層を限定する様な結果を生じた。常に時間に追いまわされて、ある一つの立場から物事を浅く広く捕えた傾向が強かつた為、残念ながら私達の研究の意図もはつきり打ち出す事ができなかつた様である。

多角的研究の重要さ、これによつて全ての問題が解決されるといつても過言ではないように思う。

いついかなる時でも、私達の主体性を発揮する事が要求されるが、個々の内面にあるものを研究する学問とは異なり、ある一つの実験結果より 次の実験へと段階を追つて研究し、その結果、ある結論を得ようとする学問である為、前者程主体性を発揮し、且つ、女子大独得のカラーを織り込む事が困難である様に思う。確かにある一つの事を実践する場合、その集団独自のカラーを打ち出す事が必要であるし、又要求される。しかし往々にして、研究成果よりもむしろ集団のカラーをもつて評価される事もありうる。カラーのない集団程魅力のないものはないのである故、集団が評価される発表物にこれを織り込む事は当然の事である。

意図をはつきり打ち出した多角的研究及び発表、そしてその中に女子大独得のカラーを織り込むこと……という具合に、来年度からは今年度と異なり、種々の事柄が要求されると思うが、これらの事を立派にやりとげるか否かは、全て私達学生の手にかかっているのである。今年度の貴重な経験を生かして、来年度も又私達学生に課せられた責任と義務とを推行し、おゝいなる飛躍をとげる様努力したいと思う。

---

## 学 園 祭

---

### 甘味料に関する実験および調査

大食3 協力者 木戸，蔵田，東馬，河野，小柳  
中村，古田，林，久保，井上

私達にとっては入学以来初めての食物学科の展示が行なわれる事になり、どのようにすればよいか何もわからないのに、私達が展示を担当することになり、当日まで約2週間程しかなく、当時私達が展示しようと思つていた“牛乳の品質”について参考書を読み、何をどのようにするか、だいたいの目安をつくり、先生に相談に行き、そこで他の学年が